

笑顔笑顔の初V

3人のプレーオフを制す

通算2オーバー 146

50歳の江口 信二（大博多）



とびっきりの笑顔を見せた。笑顔がトレードマークでもある江口が最上級の喜びを表現した。「やっと取れました。ホッとしました。いろいろ苦い思いをしてきましたからね」。これまで何度か九州というタイトルを目の前にしながら、江口の手から逃げて行った。2019年の九州ミッドアマ（かごしま空港36）では初日70で首位タイながら最終日78で3位に。翌2020年の九州アマ（熊本空港）は4日間競技から2日間に短縮されたのだが、初日2位タイの江口は最終日に78と崩れて15位タイとなる。「あの時は気持ちで負けていた」と振り返ったが、辛い第2ラウンドとなった。

今回はその最終日が逆転のステージに変わった。初日はトップに6打差の17位タイ。そして、最終日に4バーディー、2ボギーのベストスコア70をマークして、3人のプレーオフに持ち込んだのである。

相手は亀井敏樹（武雄嬉野）と新高英明（大村湾）。プレーオフは18番ロング⇒1番ミドル⇒2番ショートの繰り返しで行われた。最初の18番で新高がティーショットを左に曲げたのが響いて脱落。江口と亀井はともにパーで次ホールに進んだ。1番では亀井が第2打をグリーン右の池に落としてボギー。2オン2パットの江口に軍配が上がった。「最後のパット（40cm）はしびれました」。通常だと何ということもない距離が初優勝がかかっていただけに、江口にかなりの重圧が押し寄せていた。大小含め、これで4勝1敗とプレーオフには強いところを見せた。

初優勝の要因一。①「結果を出さんといかんというモチベーションが出てきた」。今年から江口は福岡南部研修会（約70人）の会長に就任。立場上「ちゃんとせんといかん」と試合にかける意気込みに変化が出た。さらに、インタークラブでは大博多のキャプテンに指名された。②江口が師匠と呼ぶ九州シニア、九州ミッドシニアの覇者・山浦正継（志摩シーサイド）からのアドバイスも大きい。「自分が一番と思え」と気持ちの上で優位を保つように。③技術面では「パットとアプローチが劇的に変わった」と胸を張った小技に磨きがかかったのである。ドライバーの平均飛距離は250ヤード。方向性重視ではあるが、若い選手と比較すると、やはり劣る。その分は技で補う。



ゴルフとの出会いは中学の頃、父・重信さん（83歳）に練習場へ連れて行ってもらうからだが、その後は熱心に取り組んだり、仕事の関係で離れたりもした。江口本人が「40代に花開いた」と2014年に日刊アマの九州と全国を制した実績を持つ。ミッドアマの全国大会出場は今回が3度目。2016年が34位タイ、2019年が33位タイと納得した成績を残し

ていない。「今度こそ上位に入りたい」と九州チャンピオンの看板を背負って臨む。

《写真はプレーオフに臨んだ左から亀井、1人おいて、江口、1人おいて、新高》

○プレーオフで敗れた両選手

亀井敏樹（武雄嬉野）「18番で下から3mのバーディーパットを決めきれなかったのが悔しい。1番は上空のアゲンストの風を読み間違えた。プレーオフは初めて負けました。これで3勝1敗に。全国大会には飛距離アップのトレーニングをして臨みたい」

新高英明（大村湾）「地元だったので優勝したかったですね。（プレーオフ前の）17、18番の連続バーディーでプレーオフに持ち込めたのは良かったんですが。全国大会ではまずは予選を通過して、上位に食い込みたい」

